

空



2003年

SORA 2号

晴夜 (2)

柴田 佐知子

草そよぐ丈となりたる仏生会
馬の子の乳のむほかは跳ねてをり
カーテンを割るや大きな春の月
春雷やいきいきめぐる悪女の血

島の端は海と重なり武者幟

―「俳句界」五月号より―

魚まつる獺の手思ふ晴夜かな

うれしくてつま先とびの雀の子

龍天に登る赤子が伸ぶ縮む

島の端を踏んで遊びし遅日かな

また猫を胸にひきよす春愁ひ

神官の白く過ぎたる牡丹かな

―「ウエップ俳句通信」十四号より―

立　　夏

高倉　和子

仏壇に少し間をあけ雛飾る

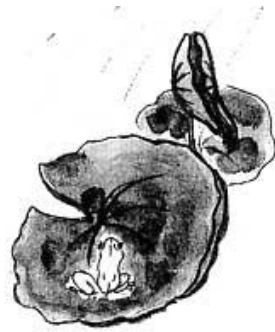
雨のあと山美しき蒹葭草

鋭角に夕日射し込む踏絵かな

目刺売る海より低きところにて

熟考の果ての微熱や春の夜

青空に山のせまりし上り籜



鳥帰る風に傷つくことあらむ

最後まで父の残りし春焚火

鶏の時を違へて日の永し

山を出る水の脈打つ立夏かな

涼しさや白は産着にはじまれり

養生の母に滴る山のあり

薄暑かな匂ひうすれし青畳

夜濯ぎのひとりの音と思ひけり

母の病父に託せり栗の花

春から夏にかけて木々や草花が生命力に溢れている。カンバスを飛び出しそうな勢いがその色にも表れているようだ。あらためて自然の営みの偉大さに気づかされる。

人間のわがままで壊してきたものの代償の大きさは取り返しのつかないところまで来ている。人間は地球の一部だというのを素直に受け止め自粛して暮らして生きたいと思う。

夏座敷

秋 千晴

子の丈の雛壇越えてしまひけり

☞ 枸杞の花左遷の友を見送りぬ

ふらここにふたり乗りして息ひとつ

君とゆくずれやすかりし春シヨール

ネクタイの歪み直せり初桜

伊予柑の匂ひのつきし受話器とる



野に遊ぶ草花図鑑ひろげつつ

菜の花の筑後川また大きくす

菜の花に囲まれ光る握り飯

虹立ちて見知らぬ人に声かける

休日の夢もゆつくり爽竹桃

まくなぎの高さ定めて漂へり

青桐や風通しよき夫の留守

白壁を斜めに來たる夕立かな

柄杓置く竹の音ある夏座敷

以前は雑草としか思っていなかったものが、俳句をはじめてからひとつひとつに目がいくようになった。食材でしかなかった土筆や筍を丁寧に見ていることに気づく。自然に向ける眼がやさしくなってきたと思う。動物に対してはどうだろうか。

犬が大好きで三匹飼っており、総じて動物は好きだが守宮だけはだめだ。去年の十一月ごろまで長々と居たのに今年はまだもう早々と三月三十一日より出戻してきたのである。私にとって憂鬱な季節の到来だ。それでもいつか好きになれる日がやってくることを信じて今日も庭に出て行く。

峰 雲

あさなが捷

子に哭かれ大獅子飛んで逃げ出せり

置物のごとき夫なり日脚伸ぶ

至らぬと思ひ知りたる葛湯吹く

ヒヤシンス小康を得て家にあり

御開帳消防団が案内せり

ゴム細工のやうに跳ぶよ青蛙



膝の傷説明する子草萌ゆる

春が好き水溜り跳ぶことも好き

皺ふかき手で包まれし花の昼

牡丹は非情を隠しもつてをり

空梅雨や居丈高を子にいさめらる

気の重き訪問先や白丁花

夕映えの中に入りたるヨットかな

峰雲や子は手も脚も伸びきつて

船遊びくりを大きく帯ゆるく

二十代の終わり頃、ある大学の二部に通っていました。一年のときの日本文学は白石悌三先生による「おくのほそ道」でした。歯切れのよい明快な口調で芭蕉について、その時代背景について教えて頂きました。また、在原業平や西行、西鶴などからめながらあらゆる角度から「おくのほそ道」を熱く語られました。とても楽しい時間でした。

長い時を経て俳句を始めた頃、新聞で先生の訃報に接しました。講義を受けた者の中から俳句に興味を持つ者が一人増えたことをお伝えできなかったことが残念です。その記事に紹介されていた先生の句「粒よりの苺よ一期一会なる」は忘れられない一句となりました。

ふらここにふたりのりして息ひとつ 秋 千晴
 ブランコのふたり乗り。久しぶりに思い出した。立っている子が力いっぱい漕ぐ。坐っている子もそれに合わせて漕ぐ。「息ひとつ」ですべてが捉えられた。

置物のごとき夫なり日脚伸ぶ あさなが捷

「置物のごとき夫」というおもいきりのいい措辞には驚いた。「そうそう、うちのもそう」と共感される方も多いのでは。捷さんのほのぼのとした眼差しが楽しい。

二人みて老いすすみぬる蝶の昼 荒井千佐代

この世で絶対である老いと死。刻々とすすむ老いがあるがままに受け止めた静かな作品。「蝶の昼」によって二人で重ねていく時間のあたたかさが伝わってくる。

永き日の大学病院へ一歩一歩 小林 朱夏

朱夏さんの十五句には衝撃をうけた。突然の母上の癌宣告そして手術。自らの動揺、痛みを鮮烈に詠まれ胸に迫る。母上の経過は良好で順調に快復されているとの事。

寒明の鯉の目そろふ水の上 十河 波津

鯉が水から身を乗り出したとかか口を突き出したとかいいう句は見るが、「鯉の目そろふ水の上」は新しい。寒明け即ち春の到来の季感とも響きあう。本尊は煙に遠し御開帳 苑 実耶

実耶さんの把握の確かさを再確認する御開帳の連作。「線香の匂ひ濃くなる御開帳」と共に、現場での取材力の強さが句に漲っている。

筍を配る順番きめてをり

高倉恵美子

恵美子さんは広い庭の一隅の竹林で毎日のように筍を掘られるとか。筍の句で「配る順番」とは面白い。恵美子さんなればこそその作。

春昼の新幹線は眠り箱

遠野 萌

私も出張で利用することも多い新幹線だが、「新幹線は眠り箱」とはいい得て妙。柔軟な感性に脱帽。

神鈴にこちら向きたる蝮蛇草

青山 悠

うまい句である。薄暗く湿った空気が自ずと感じられ、蝮蛇草も見えてくる。鳴らした神鈴の音でぐいと蝮蛇草が丈を伸ばしたに違いない。

瀬戸内の海の斑見えて葱坊主

高村 淳

海の深浅によるものだろうか、たしかに濃淡がみられる。これを「海の斑」とはみごとに表現だ。地図の上蟻螂佐渡へ足伸ばす 吉田 龍

広げた地図の上の真つ青な蟻螂。伸ばした足のはは佐渡。純粹な眼が端的に捉えて秀逸。

世界遺産経蔵までの花の礎

ふじの茜

慶州・海印寺の前書きがある。世界遺産の経蔵まで桜の燈とはまことにスケールの大きな景である。